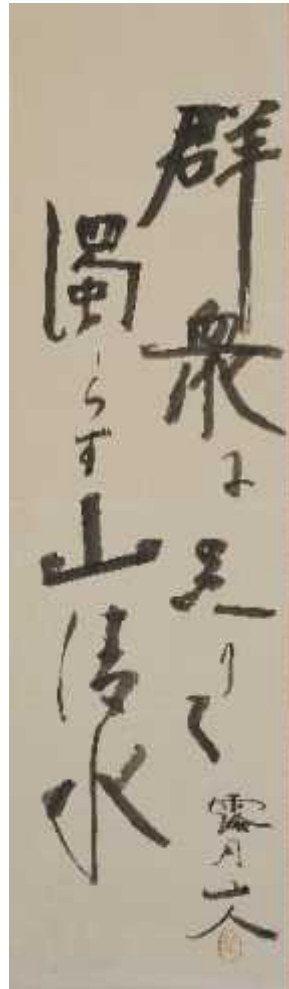


石井露月顕彰全国俳句大会 兼第66回秋田市短詩型大会



【主催】 秋田市・秋田市教育委員会、
石井露月顕彰全国俳句大会秋田市短詩型大会実行委員会

【後援】 秋田県・秋田県教育委員会・雄和芸術文化協会・秋田県俳句懇話会・
俳人協会秋田県支部・秋田県現代俳句協会・秋田県歌人懇話会・
秋田県現代詩人協会・秋田県川柳懇話会・秋田市俳句人連盟・
秋田市歌人協会・秋田市川柳協会・秋田魁新報社・朝日新聞秋田総局・
毎日新聞秋田支局・読売新聞秋田支局

石井露月顕彰全国俳句大会
兼第66回秋田市短詩型大会

目次

開催要項

開催日程

応募作品

一般の部 俳句部門

・入賞作品と選評

森田千枝子先生選

佐藤 景心先生選

佐々木公平先生選

・特別賞／全応募作品

一般の部 短歌部門

・入賞作品と選評

高島 清子先生選

・特別賞／全応募作品

一般の部 詩部門

・入賞作品と選評

鈴木 修一先生選

・全応募作品

一般の部 川柳部門

・入賞作品と選評

長谷川酔月先生選

・特別賞／全応募作品

小・中・高校生の部 俳句部門

・入賞作品

・選者講評

森田千枝子先生

佐藤 景心先生

佐々木公平先生

小・中・高校生の部 短歌部門

・入賞作品

・選者講評

高島 清子先生

小・中・高校生の部 詩部門

・入賞作品

・選者講評

鈴木 修一先生

小・中・高校生の部 川柳部門

・入賞作品

・選者講評

長谷川酔月先生

令和六年度 応募状況

大会実行委員名簿

表紙の説明

石井露月顕彰全国俳句大会兼第66回秋田市短詩型大会

開 催 要 項

【趣 旨】

郷土の先覚者石井露月は、正岡子規門下において近代俳句革新の草創期に重要な役割を果たすと共に、文学者のみならず医師であり更に教育者として村づくりの先導者でもあった。こうした露月の功績を顕彰するため、短詩型（俳句、短歌、詩、川柳）の作品を広く募集し、作品づくりを通して文学に親しみを持ち、心豊かな芸術文化の振興を図る機会として、「石井露月顕彰全国俳句大会兼第66回秋田市短詩型大会」を開催する。

【期 日】

令和6年9月14日（土）

【会 場】

秋田市雄和市民サービスセンター

【主 催】

秋田市、秋田市教育委員会、
石井露月顕彰全国俳句大会秋田市短詩型大会実行委員会

【後 援】

秋田県、秋田県教育委員会、雄和芸術文化協会、秋田県俳句懇話会、俳人協会秋田県支部、秋田県現代俳句協会、秋田県歌人懇話会、秋田県現代詩人協会、秋田県川柳懇話会、秋田市俳句人連盟、秋田市歌人協会、秋田市川柳協会、秋田魁新報社、朝日新聞秋田総局、毎日新聞秋田支局、読売新聞秋田支局

大会日程

【日時】

令和6年9月14日（土） 午前10時から

【会場】

秋田市雄和市民サービスセンター（秋田市雄和妙法字上大部48番地1）

【日程・次第】

9:15	10:00	11:00	12:00
受付	開会・表彰式	休憩 (10分)	講演・閉会

1 開会式

主催者あいさつ

教育長 佐藤 孝哉

2 表彰式

(1) 作品講評 俳句部門、短歌部門、詩部門、川柳部門

(2) 表彰(各部門) 小学生、中学生、高校生、一般(大学生含む)

3 講演

演題 露月「没後100年」を見据えて
～記念事業の下準備について～

講師 元秋田県生涯学習センター所長

フリーライター 武藤 素魚(四郎)氏

【略歴】昭和51年～ 県内各高等学校 教諭

平成9年～ 秋田県教育庁生涯学習課

平成20年～ 北秋田市立合川高校 校長

平成22年～ 秋田県生涯学習センター 所長

平成24年～ フリーライターとして主に秋田県内の
「近代文芸史」を研究、執筆

4 閉会式

(1) お礼のことは 大会実行委員会会長 伊藤 洋文

一般の部

俳句部門

森田 千枝子 選

特選

峰雲や組体操は総崩れ

八郎潟町 帆村 類

入選

日常をくるりと粽巻きし母

横手市 片倉 弓

山のこゑ両手にあつめ清水飲む

にかほ市 佐々木 亮子

秋天に若き空師の声透る

秋田市 鈴木 善陽

秀逸

夕焼や孤独になつていい時間

横手市 片倉 俊秀

露月忌や図書館にふと立ち寄りぬ

秋田市 風野 悠美

宇宙に住む未来来そうな白夜かな

井川町 齋藤 幸子

農を継ぎ祭り笛継ぎ酔はさるる

大仙市 藤井 洋舫

高尾山の四股名もありて草相撲

秋田市 田口 穂心

選評

〈特選〉

○峰雲や組体操は総崩れ
組体操は危険なことだから文科省が学習指導要領から外している。今は殆ど見ることがないので、作者の回想の一句だろうか。運動会での組体操が始まると、テントはいっそう盛り上がる。あと一段のところまでピラミッドは怒涛のような溜息の中で総崩れ。空には巨大な積雲。日本の運動会文化の時代背景を映した一句。

〈秀逸〉

○夕焼や孤独になつていい時間
誰もが集団社会の枠組みの中で暮らし、ときにしがらみや縛られた時間から解放されたいと思うもの。作者は夕焼けを前に一日の疲れを癒し、何も持たない素の自分と対峙する。この僅かな時間が明日の活力源なのでしよう。「孤独になつていい時間」と自分に問いかけるような謙虚さにも好感が持てる。

○農を継ぎ祭り笛継ぎ酔はさるる
やや日焼け気味の笑顔の好青年が浮かび上がってくる。担い手不足の農村地域にとつて、この青年の存在は村全体の喜びであり未来なのである。豊穰を願う村祭。青年を囲んで村人たちは「まんず一杯飲んでくれ」と次々と杯を差し出しているのだろう。「酔はさるる」の措辞に人々の温かさが伝わって来る。

〈入選〉

○日常をくるりと粽巻きし母
日常の中心にいる母の粽。笹の葉をくるりと巻き、もち米を入れて紐できゅつと結ぶ。その手早さ、見事さに母への愛情と尊敬の念。

○山のごゑ両手にあつめ清水飲む
夏の山中はひんやりして気持がいい。耳を敬てると小鳥の飛び交う声や葉擦れ音、苔の匂いなど森は無数の命で満たされている。
作者はそれらを山の声として感受。手杓で清水を飲み、作者自身もま

た生かされている命を自然の中で再生する。

○秋天に若き空師の声透る

高木の手入れが困難になり伐採する家庭も多くなった。若い空師が来て、弟子にてきぱきと指示を出し、あつという間に大樹を片付けたのだろう。きつと若き空師は露月の「雲の音」を聞いている。

○露月忌や図書館にふと立ち寄りぬ

露月の偉業を記した資料がたくさん並ぶ図書館。その図書館にふと立ち寄ってみたくなったのでしよう。図書館は地域のコミュニケーションの場のひとつ。折しもその日は露月忌。露月に引き寄せられたのでしよう。

○宇宙に住む未来来そうな白夜かな

狭い日本。危機感に溢れる地球。破壊や資源を掘り続け、やがて人類は枯渇した地球を捨てて宇宙に飛び出すかもしれぬと白夜の暗示。

○高尾山タカオヤマの四股名もありて草相撲

地域行事の相撲大会。めいめい自由に四股名をつけて楽しむ。町のシンボル「高尾山」が呼ばれて土俵に上がった時はさぞや盛り上がったことでしょう。郷土愛が伝わって来る。

森 田 千枝子 先生 秋田県現代俳句協会会長

昭和二十七年秋田県井川町生まれ。「麦」同人。麦秋田標句会代表。井川俳句会代表。麦作家賞、秋田県現代俳句協会作家賞受賞。現代俳句永年会員。秋田県俳句懇話会副会長。秋田県生涯学習奨励員協議会会長。井川町在住。

佐藤景心選

特選

北に曳く飛行機雲や夏に入る

五城目町 八柳 知徳

入選

母と子の同じ笑窪やさくらんぼ

秋田市 大橋 風太

藤垂れて水面くすぐる雨の寺

秋田市 富谷 凡慶

秋風やむらさきがる古戦場

湯沢市 加瀬谷 敏子

峰雲や組体操は総崩れ

八郎潟町 帆村 類

秀逸

放牧の牛遠くより夏野かな

秋田市 工藤 和洋

峰雲や空へ空へと足場組む

秋田市 鈴木 善陽

ぬひぐるみ離さず眠る日焼の子

秋田市 伊藤 恵美子

選評

〈特選〉

○北に曳く飛行機雲や夏に入る
時季はゴールデンウィークのころ。夏に入ったことを予感させる青空に現れた幾筋かの飛行機雲。「北に曳く」飛行機雲は、春を押しつけて夏を引き寄せる雲の趣。大景をとらえ、いよいよ始まる夏本番を感じさせる句である。

〈秀逸〉

○放牧の牛遠くより夏野かな
夏野に放たれた牛が、遠くからこちらに向かい歩いていく情景。野の広がりとともに、遠くには連山も想像され、眼前に広大な夏野が浮かぶ。

○ぬいぐるみ離さず眠る日焼の子
日焼子が日中の遊びなどに疲れて深い眠りについた。外遊びが好きで健やかに育っている子供だが、ぬいぐるみを離さないところにあどけなさをみせる。

〈入選〉

○母と子の同じ笑窪やさくらんぼ
さくらんぼを前にする母と子。二人の笑窪から艶やかで美味しそうなさくらんぼがみえる。エクボ・サ克蘭ボの「ボ」の同音繰り返し心地よい。

○藤垂れて水面くすぐる雨の寺

「くすぐる」が発見。寺の池のたもとに咲く藤の花が意志を持っているかのように垂れ下がって水面をくすぐる。

○秋風やむらさきがる古戦場
意味深長な中七の惜辞。古戦場の当時を思う作者の感得した表現ぶり、秋風とマッチして動かしがたい。

○峰雲や組体操は総崩れ
蜂雲の下繰り広げられた組体操が総崩れ。自然が作り出す蜂雲の威容と、人工物のもろさの対比のおもしろさ。

○峰雲や空へ空へと足場組む
ビルの建設か補修のために組み上がっていく鉄骨の足場。折しも空には蜂雲が聳え立つ。力強い生命力をみる。

佐藤 景心 先生 俳人協会秋田県支部長

昭和二十六年秋田県生まれ。平成元年狩入会、鷹羽狩行に師事。平成十五年狩同人。平成三十一年一月狩終刊に伴い香雨同人。平成二十一年俳人協会秋田県支部幹事。平成二十五年同県支部常任幹事兼事務局長。平成三十年七月公益社団法人俳人協会評議員。平成二十七年五月俳人協会秋田県支部副支部長兼事務局長。令和五年五月同県支部長。秋田市在住。

佐々木 公平 選

特選

鳥海山に縦縞の膚夏は来ぬ

美郷町 二藤 誠祥

入選

青空の課外授業やりんご狩

秋田市 渡部 謙次

右手に摘み左手に梶や蓴舟

秋田市 神成 石男

曾孫を爺似婆似と盆の家

秋田市 加藤 隆二

秀逸

露月の句を拾ふ歳時記星月夜

由利本荘市 佐々木 成

田の水のかがやく尾根の高尾山

埼玉県川口市 加藤 三振

ぬひぐるみ離さず眠る日焼の子

秋田市 伊藤 恵美子

朝霧の雄物の流れ墨絵とす

八郎潟町 田中 敏裕

選評

〈特選〉

○鳥海山に縦縞の膚夏は来ぬ
「鳥海山」は固有名詞。日本の名だたる山は、すべて「神」を祀っている。「中七」に借り物でない実感がある。

〈秀逸〉

○露月の句を拾ふ歳時記星月夜
月のない夜空が、星明りで月夜のように明るいことをいうが、「星月夜」とはなんと美しい言葉である。

○朝霧の雄物の流れ墨絵とす
霧に包まれ、悠々と流れる雄物川。まさに水墨画の世界を彷彿とさせます。

〈入選〉

○青空の課外授業やりんご狩
地元の小学生による課外授業、子供達の生き生きとした表情が浮かびます。

○右手に摘み左手に梶や蓴舟
小舟に乗り、沼を静かに廻り蓴菜を採る風景は、季節の風物詩。

○曾孫を爺似婆似と盆の家

「孫」を俳句に詠むことは難しいが、盆と正月は一族が集まる機会、「盆の家」とはめでたい限りである。

○田の水のかがやく尾根の高尾山

代掻きが終わり、田植えが出来る状態の田んぼ、田に映る山の稜線が眩しいです。

○ぬひぐるみ離さず眠る日焼の子

「孫」という調味料を加えなくとも、お孫さんの俳句に詠める。「日焼」健康が一番。

佐々木 公平 先生 秋田県俳句懇話会会長

昭和二十四年秋田県由利郡金浦町（現にかほ市）生まれ。昭和四十七年、秋田県庁入庁。獣医師として畜産農家の生産、家畜衛生の指導に従事。俳句を木附沢麦青に師事。秋田県俳句懇話会会長。秋田市在住。

特別賞 (大会実行委員会)

001	若きらの語る八月土崎忌	大仙市 櫻田 北投石	010	秋しぐれことば素直な三頭火	
			011	露月の忌ふる里山河あたたかし	由利本荘市矢 相庭 白雨
			012	ごろんごろん露月生家の南瓜かな	
			013	あの虹を掴まんとして離陸せり	三種町 三浦 静佳
			014	柿若葉石のせせらぎ生む庭師	
123	半島の鼻のあたりや盆帰省	大仙市 加藤 昭子	015	田植え日は黒板に名を朝早く	横手市 みさわ 長子
			016	さつき晴れ鳥海仰ぎ管笠 <small>かさ</small> ならぶ	
			017	母と子の同じ笑窪やさくらんぼ	秋田市 大橋 風太
			018	白神の樺の木漏れ日風五月	
			019	春近し膨らんでゆくすきま風	足立区 佐藤 春夫
			020	蛭鳥賊光る漁網の日本海	
			021	露月の句を拾ふ歳時記星月夜	由利本荘市 佐々木 成
			022	読み返す姉の遺歌集夕ざくら	
			023	アロハ着て異人降り来る豪華船	由利本荘市 佐々木 豊
001	若きらの語る八月土崎忌	大仙市 櫻田北投石	024	星映す大河の鼓動虫時雨	
002	八月や疎開児老いて恩送り		025	大瑠璃のこゑや岨谷峡鶉養	秋田市 上松 ひろし
003	山人忌虚子の悼句の南瓜沸	大阪府寝屋川市 森 一心	026	郭公に急かされ床へ夜勤明け	
004	渋柿を露月に処方子規名句		027	鳥海山に縦縞の膚夏は来ぬ	美郷町 二藤 誠祥
005	蒼茫たる露月の里はさみだるる	秋田市 大宮 浩樹	028	分水の水を満たして代田かな	
006	清清し基盤目様の田植えかな		029	草刈りしあとの草の香散歩道	大仙市 戸沢 ケイ子
007	村中の結ひのつながる田植どき	秋田市 種村 聖巴子	030	小さな風大きく見せて藤の花	
008	綾取りの指に蝶蝶生まれけり		031	特訓の留学生の竿燈技	秋田市 竹下 氣平
009	気になりぬ修司飛ばした夏帽子	能代市 古川 よしみ			

032	南瓜忌や和漢の才のおびただし			034	日常をくるりと粽巻きし母		
033	母の日やごっちゃ混りの荷を開く	秋田市	小林 春光	035	サイダーの泡やキラキラネームのみ	横手市	片倉 万葉子
034	無人駅ひとりこぼして夜の蟬			036	輝ける麦わら帽子畑の父		
035	囀や山野に響く鍬の音	秋田市	長川 ユリ子	037	太平の夕焼け手づかみ女米木夜叉 <small>おたいら</small>	八郎潟町	田中 敏裕
036	鯉幟指差す稚児の煌めく日			038	朝霧の雄物の流れ墨絵とす		
037	露月生みし雄物の里や秋豊か	八郎潟町	安田 龍泉	039	ぬるめの爛手酌で惚ぶ春の夜	秋田市	関 徹彌
038	夏祭夜店が灯る坂が混む			040	「熊出沒」幟八本風薫る		
039	茄子苗や試練の風に立つ二本	秋田市	鈴木 直子	041	山のこゑ両手にあつめ清水飲む	にかほ市	佐々木 亮子
040	遠郭公菩提寺あたり霧の中			042	星月夜夫に天窓開けてをり		
041	いとこ煮を献じ露月の忌を修す	秋田市	岩谷 塵外	043	受験子の時おり月に吠えてをり	埼玉県鴻巣市	渡邊 照夫
042	流燈となりても父母の寄り添へる			044	植木市過保護戒められて買ふ		
043	高尾山 <small>たかおやま</small> の四股名もありて草相撲	秋田市	田口 穂心	045	延長戦西日を砕く逆転打	由利本荘市	工藤 進
044	正装は国防色の終戦日			046	八十八の手間の輝き今年米		
045	樹下葬の小さな墓標風薫る	秋田市	和田 仁	047	往診は夏負け何の冷や一杯	由利本荘市	土谷 俊雄
046	目で語るだけの看取りや秋時雨			048	雄物川淀みに群れて緋鯉かな		
047	抗弁を丸くおさめる洪団扇	横手市	大坂 和子	049	右手 <small>めで</small> に摘み左手 <small>ゆんで</small> に梶 <small>ぬなは</small> や尊舟	秋田市	神成 石男
048	来し方に影ちりばめる河鹿笛			050	あふられて鍬にのけぞる真竹の子		
049	風となり野にトンボ追ふ兄弟 <small>あにまこと</small>	秋田市	渡部 謙次	051	泥 <small>あ</small> に生れ下卑 <small>げびる</small> ことなき蓮の花	秋田市	村田 桂
050	青空の課外授業やりんご狩			052	蟬塚 <small>せみづか</small> や百磴 <small>もも</small> 踏み煩惱解き放つ		
051	「まぶ」と「まづ」行き交う釣瓶落しかな	秋田市	富谷 凡慶	053	ひまわりやゴッホはもつて厚塗りす	湯沢市	加瀬谷 敏子
052	藤垂れて水面くすぐる雨の寺			054	秋風やむらさきがかる古戦場		
053	先鋒は面一本や五月晴れ	横手市	片倉 弓				

075	仲直りかないし後や二重虹	大仙市 鈴木 アヤ子	097	草むしり指から夕日こぼれおち	八郎潟町 小玉 光子
076	暮れかかる湯屋の窓辺や山法師		098	音合わせ学校祭あり夏木立	
077	母の忌や仏飯に添へ一夜酒	横手市 片倉 俊秀	099	蔵書みな古りにけるかな白障子	秋田市 田中 テル子
078	夕焼や孤独になつていい時間		100	我の身を励ましてをりばっけ味噌	能代市 金野 長悦
079	古里の流れ変はらず青葉山	大潟村 田村 陽子	101	獣の留守むらがり生ひぬ破れ傘	
080	這ひ上がるやご変身の刻を待つ		102	釣り船の夫のせなに日が沈む	
081	プリンセスミチコてふ薔薇はんなりと	秋田市 武藤 素魚	103	産声や上へうえへと桐の花	横手市 照井 志げ女
082	終活のポニーテールや街薄暑		104	岩合のシャッター音やこねこの瞳	
083	薫風や露月の山河ふくらまし	秋田市 松井 憲一	105	露月郷里を育む木の芽風	秋田市 岡部 いさむ
084	露月忌や遺影律儀に正座して		106	高尾山亀鳴くを聴く露月句碑	
085	洗ひけり俳句勧めし母の墓	大仙市 藤井 洋舩	107	句碑四つ高尾山めぐりて露月の忌	秋田市 布田 日斗美
086	農を継ぎ祭り笛継ぎ酔はさるる		108	静脈の色あざやかなり菖蒲の湯	
087	みちのくの夏の真昼や無人駅	秋田市 宇佐見 レイ子	109	峰雲や組体操は総崩れ	八郎潟町 帆村 類
088	三筋なる白雲交差して立夏		110	鈴蘭の山河に帰る夢のあと	
089	露月邸左岸麓で蝉も鳴	秋田市 池田 弘	111	薬草に母の面影梅雨探し	秋田市 最上 悦
090	梅雨空か八十路のゴルフ三の位		112	鶯の一と声添えてパンを焼く	
091	健脚の首からやつれ茄子の馬	能代市 千丸 静子	113	千秋の路線廃止やバス時雨	秋田市 須永 我流
092	熊除けの御神酒をぐいと山開き		114	呱呱揚げし里に新鮮鯉のぼり	
093	惜春や吉祥天の掌に宝珠	能代市 柴田 テツ子	115	白一線筋を通すや燕子花	秋田市 佐藤 紫星
094	素裕やどのみち人はひとりぼち		116	母の日や百歳過ぎて早二年	
095	男の子生る峡に久しき鯉のぼり	秋田市 加藤 隆一	117	田の水のかがやく尾根の高尾山	埼玉県川口市 加藤 三振
096	曾孫を爺似婆似と盆の家		118	高尾嶺にこぞりて翳す新松子	

119	紫陽花や古刹に展ぐ日本海	秋田市 田名部 レイ子	141	幾度もいのち光らせ蛍死す	秋田市 風野 悠美
120	園児らの声をまとめて蛇隠る		142	露月忌や図書館にふと立ち寄りぬ	
121	露月の忌声なき声を聞く三廬	秋田市 工藤 光一	143	スケートの琢みな技に涙する	秋田市 小原 照子
122	万緑や男鹿へ夜叉鬼の飛びし尾根		144	踊る心高校野球のホームラン	
123	半島の鼻のあたりや盆帰省	大仙市 加藤 昭子	145	夏休みだけ子どもの声する過疎の村	秋田市 清水 佟子
124	昼寝覚め我等この世のエキストラ		146	苔むして悠久無言道祖神	
125	露月山露や夏帽子そのままに	能代市 岸部 吟遊	147	宇宙に住む未来来そうな白夜かな	井川町 齋藤 幸子
126	色変へぬ松の香を聞く露月の忌		148	日の盛犬の散歩の人もなく	
127	峰雲や空へ空へと足場組む	秋田市 鈴木 善陽	149	梅雨出水忽然と消ゆ村ひとつ	秋田市 高橋 亜希
128	秋天に若き空師の声透る		150	ぺたぺたと跣足で歩く異国の地	
129	夏木立ファーストキスは非売品	秋田市 小野寺 ひかる	151	紫陽花や花びらの先花重ね	秋田市 鈴木 秀子
130	隠し絵を探しあぐねり夏霞		152	杉の森白一面のどくだみよ	
131	六月の海の青連れ五能線	秋田市 齊藤 千哲	153	終活のひとつ成したり朝の蜘蛛	秋田市 梅崎 もえ
132	鳥海山の初夏の香を入れ塩むすび		154	五月晴れ読経に交じる子らの声	
133	熊避けのホイッスル下げ自然薯堀り	秋田市 工藤 和洋	155	ゆらゆらと銃の音なき蟹気楼	大仙市 最上 建造
134	放牧の牛遠くより夏野かな		156	青葉の木漏れ日暑き原爆忌	
135	初取りのキュウリ供る浅供用	大仙市 大畑 幾子	157	夏つばき落ちて散歩の犬仰天	秋田市 高橋 白女
136	はしり根にすわる他なし炎暑には		158	帰校子のふらりと寄りぬ若葉影	
137	百畳の堂に露月句土用干	横手市 阿部 清流子	159	文学のことなど語り梅雨晴間	秋田市 吉田 慶子
138	秋澄むや露月追慕の句碑めぐり		160	うつつの雲を見上げつ一人旅	
139	天からの母の便りか夏椿	秋田市 佐藤 渉	161	茄子漬けて紺に磨かん旨さ増す	秋田市 進藤 和子
140	異国にて戦の有りし遠花火		162	せせらぎの音の流れに蛍飛ぶ	

- 163 ぬひぐるみ離さず眠る日焼の子 秋田市 伊藤 恵美子
- 164 夕虹の消ゆるまで窓離れずに
- 165 神木の塚の大槻蟬しぐれ 湯沢市 山田 草人
- 166 山城の天守浮かばせ稲光
- 167 還暦はまだまだ青し喜寿の夏 埼玉県川口市 矢島 玲子
- 168 人生の旅に弾けり鳳仙花
- 169 軋むゴンドラ朴の花俯瞰して 能代市 首藤 圭
- 170 遺品のシャツまとい登山や稚児車
- 171 薄暑光仄かに揺れる山椒の葉 五城目町 八柳 知徳
- 172 北に曳く飛行機雲や夏に入る
- 173 谷川の水の勢い山法師 能代市 武田 光子
- 174 夕照やまっすぐ伸びて燕子花
- 175 風吼えて梅雨入り告げる夜半過ぎ 秋田市 高橋 菊恵
- 176 鼻の奥香りとどまる栗の花
- 177 高尾山座して風観る露月の忌 秋田市 加藤 一弥
- 178 郭公たおらが里にも露月句碑
- 179 トマト挽ぎひこうき雲にかざす吾子 秋田市 山谷 勇樹
- 180 赤蜻蛉秘めし炎が空を切る
- 181 ひたすらに田草取る母子三人 由利本荘市 佐々木 素風
- 182 母の手をまねる児の眸や金踊

一般の部

短歌部門

高島 清子 選

特選

かあさんの瞳のまなかに映らんと
ベッドの脇にわが身かがめる

秋田市 蓬田 真弓

刈られたる草の悶えの名残とも
日を経て庭にいきれの去らず

秋田市 石塚 美恵

ふるさとに九十の兄の元気にて
いまだ一人の農のみちゆく

埼玉県川口市 加藤 三振

整備せし圃場にあれど人手なく

荒れ地となるは見るに忍びず

秋田市 佐々木 鏡子

秀逸

竹べらの餌に口開く文鳥に

とほき或る日の授乳のいたみ

大仙市 京野 幸子

こぼこぼと山からの水途切れなき
兄の小屋にて竹の子をむく

秋田市 鈴木 直子

倒壊の建物潜る救助隊

余震退避の背に雪が降る

埼玉県鴻巣市 渡邊 照夫

入選

朝早く草刈る母が採りくるる

赤い木苺遠き思い出

秋田市 工藤 一子

選評

〈特選〉

○かあさんの瞳のまなかに映らんとベッドの脇にわが身かがめる
「かあさん」は病院や施設等にいるのだろう。そして認知症等で記憶が定かではないのかもしれない。そんな中で作者の心遣い。なんとも切ない優しさに満ちており、打たれる。「瞳のまなか」が生きた。

〈秀逸〉

○竹べらの餌に口開く文鳥にとほき或る日の授乳のいたみ
文鳥の口から蘇る鮮明な記憶。まだ目も見えない子が口を開けて乳に吸い付く。その鋭い痛みを伴う強さは、生の根源であり、子育てに伴う痛みは今に消えない。

○倒壊の建物潜る救助隊余震退避の背に雪が降る
今年一月一日に起きた能登半島地震は日本中の正月気分を吹き飛ばした。歌は、感情を交えず、情景描写に徹した表現ながら強く訴えるものがあり、なお余韻が漂う。

〈入選〉

○朝早く草刈る母が採りくるる赤い木苺遠き思い出
「赤い木苺」が色鮮やかで印象的。「草刈る母」も健康的で好ましい。一首、動画のように温かく、爽やかな回想の歌だ。

○刈られたる草の悶えの名残とも日を経て庭にいきれの去らず
「草の悶えの名残」と捉えたところにこの歌の真髓がある。作者の感性が出た。これによって余情漂う結句が生きた。

○ふるさとに九十の兄の元気にていまだ一人の農のみちゆく

九十ながら元気に「農のみちゆく」兄。作者の兄への敬慕が読み取れる。筋の通った豊饒たる生き方を彷彿させる結句だ。

○整備せし圃場にあれど人手なく荒地地となるは見るに忍びず
圃場を今の状態に整備するまで、いかほどの苦勞をし、格闘してきたことか。長年の苦勞を思うと結句の心情が痛い。

○こぼこぼと山からの水途切れなき兄の小屋にて竹の子をむく
初句の擬音が生きて、自然豊かな爽快感が出た。「兄の小屋」で竹の子の皮をむく幸せを噛みしめての歌だ。

高島清子先生 秋田県歌人懇話会顧問・秋田市歌人協会会長

一九三九年生まれ。短歌結社「白路」維持同人・選者・総務委員秋田支部長。千秋短歌会会員。秋田婦人短歌会講師。日本歌人クラブ会員。二〇一八年、歌集「薔薇は静かに」を発行。この歌集で同年秋田県芸術選賞を受賞。秋田市在住。

特別賞 (大会実行委員会)

076 農薬をかけずに育てし夏キャベツ

赤子を抱くごとく愛おしみ獲る

秋田市 工藤 一子

011 子に賤を譲って終の身が軽いなれど背筋の寂しむ日ごろ
012 庖丁を当てれば真つ直く割れてゆく正円南瓜の素直さが好き
秋田市 竹下 氣平

013 こぼこぼと山からの水途切れなき兄の小屋にて竹の子をむく
014 烟隅へ餌を隠しに走りゆくカラスの尾羽のはづみてをりぬ
秋田市 鈴木 直子

015 何事までも子離れはまだただいまといつも見ている子供の笑顔
016 牛馬の力を借りて代掻きて今は昔の遠き思いで
秋田市 田口 穂心

017 始まりがあれば終りある白神のぶなの大樹は四百年全うす
018 雨にぬれ芍薬の灯す花明かりほうき目にしみこみ雨は降る
秋田市 長尾 洋子

019 しじみ貝足で探した遠い夏潟で水浴ぶ童人植し
020 水筒の水ごくごくと高雄山雄物の流れ稲穂分け行く
八郎潟町 田中 敏裕

021 出来の良い子ほどこの地を棄ててゆく自嘲まじりの友の嘆きよ
022 倒壊の建物潜る救助隊余震退避の背に雪が降る
埼玉県鴻巣市 渡邊 照夫

023 北浦の青あじさいの群れ美しき空の青より海のおおより
024 花嫁の薄紅の頬後れ毛に葉月の風がそつと口づけ
秋田市 加成 博子

025 すかんぼを一齧りして峠道越せば待つてる椿餅どち
026 友逝きて黄泉平坂越へしころケータイするや圏外表示
由利本荘市 土谷 俊雄

027 竿燈を終えた生徒を待つ校舎お疲れ様と明かりが灯る
028 人生の節目に人は髪を切る卒業を待つ少年もまた
秋田市 福田 正樹

029 長閑なる村に空家の増ゆるなり大学生のシェアハウスに
030 五月晴緑濃き山空の青其処が素敵とスケッチする子
秋田市 山内 みどり

031 夫のいる空かと思う高さより眩しきまでに夏の陽の差す
032 パラソルの季節となりぬ誰もだれも花一輪をかかぐるように

- 033 能代市 柴田 テツ子
糧飯の日々もありたる遠き日をしぶとく生きて今の幸せ
- 034 盆の日の生家の真夜にふと覚めて遺影の母の遠き日を恋ふ
秋田市 加藤 隆一
- 035 緑色つて何種類あるのだるう悩んで走る夏遊歩道
新屋から汗かき走る雄和まで高尾望みて川光る道を
秋田市 菊地 誠
- 036 マガレット空家を囲みしんみりと来ぬ人を待つのか星あかり
秋田市 菊地 誠
- 037 暗がりの空山高く花と城母のふる里林檎の香り
能代市 金野 長悦
- 038 異邦人桜の見得にブラボーと涌いた公園津津浦浦に
能代市 金野 長悦
- 039 何方もが好きなお礼へボランテア終えて諭吉等元の座に着く
秋田市 須永 我流
- 040 子規亡き後露月盟主に起こされし俳星すたれて再興を願ふ
秋田市 須永 我流
- 041 ふるさとに九十の兄の元氣にいまだ一人の農のみちゆく
埼玉県川口市 加藤 三振
- 042 気こころが知れしどうしの堰清掃つたいし汗を春風が拭く
秋田市 工藤 光一
- 043 運動会絶えて久しきグランドにそよぐ若木の葉擦れが響かう
秋田市 工藤 光一
- 044 夕暮れの空にぽっかり綿雲のひとつ日の吾を解放とする
秋田市 伊藤 節子
- 045 柿若葉日に日に艶めく中庭に草取るわが背を初夏の風すがし
秋田市 伊藤 節子
- 046 ジュンサイを水無月の頃いただきぬぼん酢で食し節移ろいぬ
秋田市 伊藤 節子
- 047 年金日夫とのランチ楽しむもふた月流れ早く感ずる
秋田市 小野寺 由子
- 048 うぶすなの階改修碑に二人の兄百五十四段祭りに参る
秋田市 小野寺 由子
- 049 里の義姉持ちちくれてより八年経淡きピンクのしもつけ草よ
秋田市 福岡 廣子
- 050 父の日に今年も届きありがたき夕餉のビール幸と噛みしめ
秋田市 福岡 廣子
- 051 春播きの小粒のオクラ日毎伸び収穫想い夏日の草とり
秋田市 丸山 春男
- 052 書を学び作品作り写経にす「世界平和」と願いて書きぬ
秋田市 丸山 春男
- 053 お姑の形見の浴衣お気に入り暖簾に変えて忍び涼しむ
秋田市 大友 ヒロ子
- 054 白雲をバックに松の緑見ゆ水面に映ゆる桜満開
秋田市 大友 ヒロ子
- 055 緑木に黄色の提灯ぶら下げて居場所を誇示する夏みかんの木
秋田市 落合 雄一
- 056 古書店に長年通ひ遂に遭ふ露月の句集夜も読み耽る
師の子規とひとちがひの露月の日句集読みつつ忌を修しけり
横手市 阿部 清流子
- 057 稚児車黄菅駒草眼裏に咲かせるばかり山は遠くに
背広着て高級車乗り抱き合うサタンのような二人が映る
秋田市 渡部 栄子
- 058 降る雨に去年の被災を思い出づ一刻おろおろ身じろぎもせず
官庁街威風堂々聳えさせ司法の庁舎眼下を見遣る
秋田市 渡部 栄子
- 059 漆黒の腕は父の手の影をほのかに映して棚に遺れり
早苗田を風渡りゆくはるかまで人の影なく青きふるさと
秋田市 東海林 文子
- 060 整備せし圃場にあれど人手なく荒地地となるは見るに忍びず
草生津の岸に咲く桜はなキリシタン哀史を知るやしんしんと散る
秋田市 佐々木 鏡子
- 061 朝焼けに一番星と半月が雀の声よ空へと響け
秋田市 佐々木 鏡子
- 062 胡瓜なりともろこしの花が咲き新人ながらほつと一息
秋田市 鈴木 秀子
- 063 四本の西瓜苗もらい初に植え人工受粉西瓜たま球なる
初に植えなりし西瓜に受粉もし小玉西瓜を毎日見てる
横手市 小田嶋 昭一
- 064 かわたれの畔道ゆくに清浄と蕎麦の花満つ心緩びぬ
奥山の老鷲の声たたせつつ粽巻きゆくみどりさやけく
大仙市 荒川 けい子
- 065 勇ましき菖蒲叩きの子らの声村を満たして山にこたます
幼より夢と定めし大舞台今勝ち捕りてパリに羽ばたく

075 朝早く草刈る母が採りくるる赤い木苺遠き思い出 五城目町 八柳 知徳

076 農薬をかけずに育てし夏キヤベツ赤子を抱くこと愛おしみ獲る 秋田市 工藤 一子

077 かあさんの瞳のまなかに映らんとベッドの脇にわが身かがめる 秋田市 蓬田 真弓

078 はつなつの朝の匂いを嗅がんとしコジロー寄りぬ出窓の下へ 秋田市 蓬田 真弓

079 草原とわが呼ぶ庭を揺すぶりて川渡り来し風が過ぎゆく 秋田市 石塚 美恵

080 刈られたる草の悶えの名残とも日を経て庭にいきれの去らず 秋田市 石塚 美恵

一般の部

詩部門

鈴木修一選

鈴木修一 先生

昭和三十五年秋田市生まれ。詩誌「密造者」同人。県内の高校で国語科教師として勤める。令和二年七月、詩集『緑の帆船』刊行。短歌・俳句も創作し、歌誌「運河」に詩歌論「詩歌の引力」を連載中。昨秋の大会参加記念の一首、「稔り田を越え森に入る鳥影のひかり刻まん露月の里に」

特選

風を見た

秋田市 丘 はなみ

選評

特選「風を見た」花や雲と戯れる風の表情が想像力豊かに描かれている。「誰が風を見たでしょう」で始まる童謡「風」（堀口大學訳）を思い出したが、読み心地の良さで流れずに、終わりの方でぐっと深まりを見せる。「風の種」とは、他者との交友の縁の喩えであろうか。「爽やかな風」が一步踏み出す勇気をくれる最終連の描写も美しく、理に落ちることなくしなやかに描ききった佳品である。

秀逸

夏草の向うには

秋田市 西村 靖孝

秀逸「夏草の向うには」少年少女の心身の有り様を、夏らしいタッチで描き上げた作品。少女は、少年の求愛を受けず、拒まず、真夏の夜の夢を見るとき、「わがままは男の罪／それを許さないのは女の罪」（虹とスニーカーの頃）の手前のあどけなさ。最終連では、越えるべき父の存在がさらりと示され、新たなテーマ性を加えている。過去から現在という未来へ、夏空に時空の扉が開かれた。

入選

風呂敷おばあさん

秋田市 堀井 喜代子

入選「風呂敷おばあさん」AI登場で仕事を奪われる危惧よりも、人間のAI化こそ怖いと思う自分にとって、風呂敷おばあさんのアナログ感は絶滅危惧種的に尊く感じられた。細やかな描写の中に作者の思想が織り込まれている。部品として機能するのではなく、全体を包んでこそ人間でありたいものだ。：。「同じ人間なのに 反発作用」など、効果的に散りばめた風刺の表現にも注目した。

寄せられた作品には、鮮やかによみがえる昔や、人生の軌跡、忘れぬぬ岐点など、表現すべき大切なものが感慨深く描かれていたが、「詩」以上に言葉を尽くせる随想として綴られていたら、むしろ感動が増すようにも感じられた。感慨の表現が強すぎると、読者が入り込む余地を無くし、余韻が響かないこともあるように思う。読者とともに創りあげる感動、問いかけるべきことなど、作者が第一の読者の意識をもって仕上げるのも、詩を完成品に近づける有益な方法となるだろう。

風を見た

秋田市 丘 はなみ

薄青色の風を見た

薄桃色のミヤコワスレの花びらを

さやさやと撫でて

照れくさそうに 過ぎていった

透き通るような風を見た

真っ白なクレマチスの大輪に

何やらひそひそささやいて

にっこり手を振っていった

いたずらっ子の風を見た

青空にすーっと伸びた飛行機雲を追いかけ

尻尾をつかんでゆらゆら揺すった

真っ直ぐな雲はくねくね身をよじってしまった

甘い香りの風を見た

天を突く大杉に 藤の花房が指の先まで

まわりついているのを見つけ

ふわふわ揺すって 一緒に踊っていた

世話好きな風を見た

行き会う誰にも丁寧な声をかけ

道の端っこに寝そべっていた病葉を

くるりくるりと宙返りさせて喜ばせていた

幼子のような風を見た

メダカの群れが気持よさげに泳ぐ小川をのぞき

一緒に遊ぼうと水面をキラキラはねちらし

お散歩中のメダカの群れをビツクリさせていた

私の中にフルフル震える風の種がひそんでいる

いくつもの種が 何かを待っている

目に見えず 手に触れられず

いつかは外に出ようとうごめいている風の種

どこの誰に優しく温かく吹くだろうか

もしかして

激しく 荒々しく

キリキリと吹くのだろうか

震える種を抱きながら

ふと立ち止まって見上げる空から

爽やかな風が降りてきた
首すじを優しくくすぐり
髪をもてあそび

コロコロ笑って

「大丈夫だよ」と舞い上がって消えた

夏草の向うには

秋田市 西村 靖孝

夏草の向うには
 白く煙る夏空が映えて
 水色のキャンバスに
 少年は何を描こうとして
 汗の滴りと
 色濃い影法師に
 息を弾ませ
 むせかえる草いきれの
 たぎりを吸うのか
 少女の後れ毛は
 何をためらい
 少年の求愛に
 ハミングして
 健やかな汗を論しながら
 自らは
 汗ばむ午後の
 眠りに

熱帯の夜を
夢見ているのか

夏草のそよぎに
 鳥たちは唄い
 川面を渡る風は
 時に涼しく吹き抜け
 少年の少女の
 額の汗の焦慮を
 なだめ論して乾かし
 快活な真昼の笑い声は
 他愛もなくまだあどけない
 オオヨシキリが川原に
 しきりに鳴く真昼に
 少年は何を夢想して
 沸き上がる雲を
 見つめていたか
 夏空の向うの稜線に
 そして父の背中であつたか

風呂敷おばあさん

秋田市 堀井 喜代子

包み込むもの
 すべてのも
 いいものも わるいものも
 壊れそうな 小さなものも
 ごつごつした アスファルトの石を
 背中に背負っているのかもしれない
 胸の前に結んだこぶは
 神様にお問い合わせするように
 固く結ばれていて
 簡単には ほどけない
 目尻と口元の 深いしわは
 風呂敷の模様には 溶け込んで
 顔の横を流れる 白髪は
 頭のとっぺん 団子にして
 束ねられている
 動きは ゆっくりだが
 微塵のスキが見られない
 照りつける 日差し

地面から雲のような湯気が
 蒸発している
 このまま 幻のように
 風呂敷おばあさんが
 消えてしまう気がする
 私は すぐさまペンを走らせた
 車が通るのは 日常茶飯事
 平日の通勤ラッシュ
 歩いている人々は ぶつからずに
 それぞれの場所に行く
 同じ人間なのに 反発作用
 自然の磁力の持つ力なのか
 子供の 小さな手にもつアイスが
 とけて 崩れた
 高いビルの狭間からみえる 景色
 建物が壊された跡地だろうか
 蝶が舞う 野原が広がっている
 風呂敷おばあさんは
 ビルの狭間を 奥へ奥へと・・・
 やがて 小さく みえなくなつた

田沢湖

大仙市 高橋 峯夫

白浜が浸かり
 蒼白く水を湛え
 波は打たず
 動きを見せない
 湖畔の並木は
 直立を保ち
 じっとして賑わいを待っている

人の出入りのない建物の
 うすく剥げた看板は
 塗り替えを待つ
 以前のままだったり
 名前が変わったり
 時代の移り変わりを
 知らせる佇まいに
 親しみを与えてくれる

田の草取りが済めば
 開かれる青年宿泊集会

郡内各地から集まってくる
 再会の約束を胸に秘め
 新しい出会いに夢を膨らませ
 二泊三日の集まり

歌をうたい
 議論を交わし
 踊り
 徹夜で記録のガリ版書き
 ボートに誘い
 別れを惜しみ
 再会を誓い湖畔をあとにする

時代は過ぎて令和
 あの若者たちの多くは鬼籍に入り
 当時を知る人 語り合う人はおらず
 蓬莱館は解され
 玄関の松は伐られ
 跡形もない
 湖畔の北半周を通りページをめくる

たったひとつのまーるい地球

秋田市 加成 博子

たったひとつのまーるい地球に
 ぼくたちは生れた
 世界中のぼくたちが
 黄色いリボンで手と手を繋げば
 明日への夢がひろがっていく

たったひとつのまーるい地球に
 わたしたちは生れた
 世界中のわたしたちが
 赤いリボンで手と手を繋げば
 輝く希望へとつながっていく

たったひとつのまーるい地球に
 すべての人が生れた
 世界中のすべての人が
 青いリボンで手と手を繋げば
 未来に向って歩いていける

たったひとつのまーるい地球で
 悲しみ苦しみ喜びを

すべての人と分ち合い

たったひとつのまーるい地球で
 ぼくたち わたしたち
 すべての笑顔と出逢いたい

たったひとつのまーるい地球を
 大きなリボンで飾りたい

想いだすことども

秋田市 加藤 隆二

小作農家が倚りあう集落

戸数はたったの十七軒

同期のサクラは九人もいた

開關かいびやく以来という彩刷いろずりりの教科書

風呂敷に包んで登校した

鳥海山に雪形の「種蒔き爺っこ」

結びを組んで田植えをした

谷地田の先に拡がる原っぱ

煙火のろしがあがって早苗饗のろしの運動会

リヤカーに自前の濁り酒が躍る

夏休みは、お稲荷様の境内

呉座を敷いて絵日記も書いた

陽が昇ると用水路で泳いだ

みんなスッポンポン

唇を真っ青にして戯れあった

稲刈りが終わっての秋の学芸発表会

婦人従軍歌の流れる舞台

級長のH君と組んでの寸劇

斥候の役での「血染めの報告」

埋めつくした母たちの涙を誘った

鳥海嵐の哮る雪の通学路

雪標の豆殻がたよりであった

やっとの思いで辿りつき

薪ストーブを囲んで暖をとった

先生の眸が優しかった

尋常高等小学校最後の卒業生

あれから戦中戦後の幾星霜

同期のサクラも逝ってしまった

四季折り折りのメイトとの邂逅

夢寐にも忘れない想い出である

夢の詩

秋田市 岡部 いさむ

大掃除の藁箆打つ
 バタバタの音が向山に響く
 忙しい音だ

餅をつく杵の音がする
 ふつくらとした音だ

注連縄を作るであろうか
 藁打つ音がする
 豊かな音だ

横綱の土俵入の真似をしたのであろうか
 お父の大きな声がする
 まろやかな音だ

どこかの家の門松よりも
 一番枝振りが良いと自慢しながら
 手いっぱい抱え込み
 腰に付けた三刀がカタカタ響く
 はしゃいだ音だ

迎えた正月の若水汲みに
 行く足音が聞こえたと思ったら
 もう拍手が座敷に鳴る
 つつましい音だ

これからの音は最早未来の遺産か
 夢の天地創造の詩歌
 はしゃいだ音だ

買いそびれた切手

秋田市 工藤 光一

普段より少し早めに家を出て

向かう郵便局

軌むドアを開けると

「やあーお早よう!!」

既にできている行列

待ちきれない児童生徒

切手や葉書などの発売コーナーが

他の窓口より早めに開く郵便局

昭和四十五年十月二日

国際文通週間の浮世絵切手で「駅通寮」の発売日

色鮮やかで美しい図案の五十円切手

でも残念なことに途中で売り切れと窓口職員

発売日からプレミアムが付くこともある切手

仲間が明暗を分けた切手発売日

昼休み

クラスの仲間が「一枚譲れよ!!」と買うことのできた人に交渉を持ちかける

悩んだ末に譲ることを決めたクラスメイトの
ささやかな勇断

買えなかった自分も

日を改めて

親友のJ君に相談をもちかけることにした

片道2キロメートル近く向かう山あいのだ

「よく来たなあ：・まず家に入れよ!!」と

文通週間の切手のことを話し

「それは残念だったなあ」と一枚だけ譲って

もらうことにした秋の日暮れ：・

J君との交友関係は社会人になるまで続いて

切手の持つ魅力の深さを知った

土曜日の放課後2年B組に集う収集家？

それぞれのアルバムが花開く切手の交換会

教師まで話の輪に加わっていた切手収集教室

男の足跡

秋田市 渡邊 幸夫

卒寿祝いを前にした
 愚かな男の歩んだ道は
 なんと粗雑な道程なのか
 試練と懺悔の足跡ばかり
 それでも明るい老人だった

節目節目の厄年は
 欠かさずお祓いしてたのに
 報われぬ男の歩いた道は
 山と谷との苦難の道程
 不運と不遇の足跡ばかり
 それでも笑顔の老人だった

向上心の赴くままに
 奇抜に生きた男の道は
 挑戦と挫折の道程で
 失敗と貧乏の足跡ばかり
 それでも負けぬ老人だった
 律儀一途に生きた
 アホな男の歩んだ道は

期待と裏切りの道程で
 波乱と幸運の足跡ばかり
 それを愉しむ老人だった

終活期を前にした
 破天荒な男の歩いた道は
 凧と嵐の険しい道程
 後悔と懺悔の足跡ばかり
 弱音を吐かぬ老人だった

終着駅の近づいた
 老いた男の歩んだ道は
 試練試練の爪痕で
 感謝と反省の足跡ばかり
 それでも朗るい老人は
 瞼を閉じて穏やかに
 いま地平線にかかろうと
 ・
 ・
 ・

門出

名前 金万和

五十六年前の人生の出発点に立ってみた
 紆余曲折を乗り越え
 いつの間にこんな遠くへ・・・
 今思えば 結婚式の時忘れられないのは
 父の大粒の涙かも知れない
 母を早く亡くした私に
 父は人並みにと
 花嫁道具一式持たせてくれた
 しかし父にしてみれば もし母が
 生きていれば もし母が
 深い哀しみが込み上げて来たのか
 大粒の涙をポロポロ流しながら
 「頑張れよ 頑張れよ!!」と
 無口な父の大きな手が
 私の手を握った

泣くまいと思ったが
 涙が勝手に流れた それは
 父の涙の訳はきつと
 私の心奥に沈んでいたものと

同じだと感じたからかもしれない

子育てで疲れた時に
 仕事で萎えた時
 夫婦喧嘩した時
 逆境に立たされた時に
 結婚式のあの父の涙と強く握った
 大きな手を思った
 それは私を人生の出発点に戻し
 忘れてはならない初心に戻した
 母にも見せたことのない父の涙
 母の知らない長い長い父の
 哀惜の歲月
 お酒の力を借りて私に言った頑張れよ!!の
 声と無骨な父の大きな手が
 五十六年間私の心の中に生きている
 あの涙はきつとこれから私
 日常の埃を洗い流してくれるだろう

一般の部

川柳部門

長谷川 酔 月 選

入 選

里に住む過疎を逆手にとりながら

秋田市 鈴木 明夫

特 選

過疎の村ガキ大将が懐かしい

埼玉県鴻巣市 渡邊 照夫

素うどんに夢一つずつひとつずつ

秋田市 わしや みつこ

人が来る家に大きな鍋がある

秋田市 荒木 小菊

秀 逸

ふる里の星降る音を聞きに行く

能代市 柴田 テツ子

ふる里をおもえば桜あの老樹

秋田市 伊藤 光愁

生きがいを刻む男の貌となる

横手市 阿部 清風

説諭する言葉に深い海添える

秋田市 川越 柳伸

まあいいかまあいいだろう仮の世だ

秋田市 小池 遊眠

選評

〈特選〉

○素うどんに夢一つずつひとつずつ
たとえ生活が苦しくても夢を高く掲げたいという、そんな心意気が感じられる句。人生に対するひた向きな作風が好感である。

〈秀逸〉

○ふる里の星降る音を聞きに行く
折に触れては恋しく思うふる里。いつかはそんな空気の澄んだ地で心を癒やしたいという。ノスタルジックな作品である。

○説諭する言葉に深い海添える

人を指導するには、単に問題点を指摘するだけでなく、じっくり考えさせることが大事という。「深い海」が絶妙な表現。

〈入選〉

○里に住む過疎を逆手にとりながら
本県は過疎化の進展が著しいが、過疎地ならではの利点もある筈という。前向きな視点が実にいい。

○過疎の村ガキ大将が懐かしい
生まれ育った地は過疎のままだが、どこを見ても幼い頃の思い出が浮かんでくるようだ。納得の句。

○人が来る家に大きな鍋がある

昔は催しなども家の中でやるのが普通だった。そんな時には決まったように大きな鍋が活躍したものである。

○ふる里をおもえば桜あの老樹

冬が終わった後に咲く桜の花が美しい。そんな桜の木が今もあるだろうかと懐かしむ。下句が実にいい。

○生きがいを刻む男の貌となる

齢を重ねることに増える顔の皺。それは正に、その人生を刻んでいるのかもしれない。

○まあいいかまあいいだろう仮の世だ

現在の世は思うようにならないことが多いが、仮の世を忍ぶという考え方もありなんという。ユニークな視点の句である。

長谷川 醉 月 先生 秋田県川柳懇話会会長

昭和十八年秋田市生まれ。平成六年川柳銀の笛吟社創設・同吟社主幹。秋田魁新報読者文芸柳壇選者。(一社)全日本川柳協会理事。日本現代詩歌文学館振興会評議員。これまでに国民文化祭および全日本川柳大会の選者、全日本川柳2020年秋田大会(誌上)実行委員長等歴任。秋田市文化団体連盟章、東北川柳連盟功労賞、秋田市文化章、秋田県芸術選奨受賞。秋田市住。句集に「素敵な油断」「ナイーブな駱駝」。

特別賞 (大会実行委員会)

076 カマキリに根負けしたる睨めっこ

由利本荘市 佐々木 素風

- | | | | |
|-----|------------------------------------|--------|--------|
| 015 | 里に住む過疎を逆手にとりながら | 秋田市 | 鈴木 明夫 |
| 016 | 踏みだせば景色は自分色になる | | |
| 017 | 無料だから手指消毒をまめにやり | 秋田市 | 田口 穂心 |
| 018 | 長生きが出来ればリニア乗りたいな | | |
| 019 | 受験の日落ちないりんご剥くナイフ | 秋田市 | 小畑 犀川 |
| 020 | 飽きるまでやらせてごらん羽化の前 | | |
| 021 | 口止めの花札大見栄口尖り | 八郎潟町 | 田中 敏裕 |
| 022 | 人不足給与不足に嫁不足 | | |
| 023 | 哲学は母から貰う試練道 | 男鹿市 | はらた 多恵 |
| 024 | 夢を持ち瞳澄んでる過疎の子等 | | |
| 025 | 七草と呼ばれし過去持つ草を抜く | 埼玉県鴻巣市 | 渡邊 照夫 |
| 026 | 過疎の村ガキ大将が懐かしい | | |
| 027 | 気配りの数だけ皺の数がある | 由利本荘市 | 土谷 俊雄 |
| 028 | 真心と受け取った薔薇造花とは | | |
| 029 | ニンゲンを好きで男は飛躍する | 五城目町 | 細田 陽炎 |
| 030 | 父ははに貰った両手に銃を持つ | | |
| 031 | 振り向かぬ決めたこの道ゆつくりと | 能代市 | 柴田 テツ子 |
| 032 | ふる里の星降る音を聞きに行く | | |
| 033 | 賭けてみる敗者復活戦の夢 | 秋田市 | 加藤 隆二 |
| 034 | 自分史に粉飾めきし事いくつ | | |
| 035 | 落ち椿おもわず避けて振り返る | 能代市 | 金野 長悦 |
| 036 | 足下の鉢を蹴散らす夏の花 | | |
| 037 | ラ・フランスふたりの為にひとつ買う | 秋田市 | 荒木 小菊 |
| 001 | 老害を嘆くほかなし選挙民 | 大仙市 | 櫻田 野風矢 |
| 002 | 「熊出た」が日常茶飯なる怖さ | | |
| 003 | 脛まくり早苗打つのも一人前 <small>ひとりまえ</small> | 横手市 | みさわ 長子 |
| 004 | 早苗振りの忘れられないあずき汁 | | |
| 005 | 湧く泉芋びの森の好奇心 | 横手市 | 岸部 旭星 |
| 006 | よく笑う赤ん坊から貰う福 | | |
| 007 | 「すみません」インバウンドは躊躇する | 足立区 | 佐藤 春夫 |
| 008 | 安眠と力んで今夜も眠れない | | |
| 009 | かぞえ日をかぞえて指のストレッチ | 美郷町 | 二藤 閑歩 |
| 010 | 断末魔 村存続の核のゴミ | | |
| 011 | 終活をずるずるのばし生きている | 大仙市 | 戸沢 ケイ子 |
| 012 | 人間味もつといい味出したいね | | |
| 013 | 商ったしらお湯耐寒しじみ | 秋田市 | 竹下 平気 |
| 014 | 国連の決議が機能の日は遠い | | |

038	人が来る家に大きな鍋がある			061	今に知る親父の拳固手の温み	秋田市	佐藤	歩水
039	介護するされる立場になつてする	秋田市	小松	062	天に地に母が見詰める慈愛の眼			
040	次の世は女に生まれ子沢山			063	夏の日を入道雲が呼んで来る	秋田市	小原	照子
041	明日発つ俵に背中流される	五城目町	加藤	064	枕下孫の写真に慰されて			
042	火を消して母は優しい人になる			065	誓っても誓ってもなお遠い星	秋田市	加藤	柳絮
043	ほくそ笑む箆の奥の帆待ちッコ	秋田市	須永	066	何時だつて教師は走る師走まで			
044	ヴィンテージデニム襷褌襷褌誇り			067	やわらかい雲食むキリンいる平和	秋田市	池	らん丸
045	芒野や休耕田の為山の果て	秋田市	佐藤	068	ふるさとの紫陽花の夏抱き上げる			
046	朝昼晩妙薬飲んで日々好調			069	知らぬ間に古き習慣顔を出し	秋田市	風間	幸藏
047	母の日の背に昭和の影が濃い	秋田市	工藤	070	終活で、家、にこだわる我が心			
048	父の席が鉛筆立てになる矛盾			071	正論が強弁浴びて被弾する	秋田市	川越	柳伸
049	言の葉のヒラリ高みの着地点	秋田市	船木	072	説諭する言葉に深い海添える			
050	優しさはテンテン手鞠弾んでる			073	晴ればかり続くと淋し一人ぼち	秋田市	わしや	みつこ
051	平和への架け橋となれ天の川	秋田市	真田	074	素うどんに夢一つずつひとつ			
052	決断に咲くドクダミの白い華			075	助六のごとき手足の昼寝の子	由利本荘市	佐々木	素風
053	一書より叱咤激励目が覚める	秋田市	宮腰	076	カマキリに根負けしたる睨めっこ			
054	さわやかな朝一日にスイッチオン							
055	ふる里をおもえば桜あの老樹	秋田市	伊藤					
056	一日を余さぬように終いの章							
057	生きがいを刻む男の貌となる	横手市	阿部					
058	夕焼けて明日はきつといい日来る							
059	まあいいかまあいいだろう仮の世だ	秋田市	小池					
060	賤なくも父の生き方背に見せる							

小・中・高校生の部
俳句部門

入賞作品

◎小学生の部 森田 千枝子 選

特選

きのことより目を大きくしきのことり

八峰町 峰浜小二年 浦嶋 琉翔

秀逸

ラムネのみシユワワと口の中に星

八峰町 峰浜小三年 鈴木 知紗乃

YOYOYOラップを楽しむ若葉かな

秋田市 日新小五年 中道 愛緒

◎中学生の部 佐藤 景心 選

特選

恐竜もきつと眺めた流れ星

秋田市 山王中二年 古田 心宏

秀逸

涼しさや母が食器をすすぐ音

松山市 勝山中一年 野上 愛桜

友とみる水面に落ちる夏の月

北秋田市 鷹巢中三年 戸澤 侑慶

◎高校生の部 佐々木 公平 選

特選

風鈴の音色が包む祖母の家

潟上市 秋田西高等学校三年 小幡 ののは

秀逸

夏祭りゆれるちようちん光る空

秋田市 秋田令和高等学校二年 黒澤 一輝

サイダーや泡とくだける波頭

秋田市 秋田クラーク高等学院三年 加藤 昊

入選

小学校二年

21 ゆめつれてたんぽぽのわたとんでいく

八峰町 峰浜小 柳川 眞夕

23 だんご虫ちきゆうをまねてまるくなる

八峰町 峰浜小 長門 凜

27 みつばちはぶんぶんあまい音でとぶ

八峰町 峰浜小 長門 滯

28 どんぐりにむしがはいってあまやどり

八峰町 峰浜小 大高 煌也

974 なつやすみばあばとじいじいえいいね

由利本荘市 尾崎小 高橋 咲菜

小学校三年

36 つばめとぶひこうきよりもいいカーブ

八峰町 峰浜小 川尻 愛叶

46 今日おわるあかいキャップの西日さん

八峰町 峰浜小 福司 百合

86 シャトルランくるしいあとのれい茶かな

由利本荘市 西目小学校 上野 千咲希

93 し合終了ユニホームのドロじつと見る

由利本荘市 西目小 佐藤 沙紀

603 ひまわりが風にゆれてるゆめ見てる

能代市 淳城南小 大高 美咲

604 アメンボウにんじやのようににげ回る

能代市 淳城南小 佐藤 汰皇

小学校四年

48 清流の女王となって鮎のぼれ

八峰町 峰浜小 伊勢 蒼介

49 お花見のべん当山がのぞき見る

八峰町立峰浜小 北川 大翔

647 お母さんスリッパはいたらかぶと虫

能代市 淳城南小 佐々木 巧

795 十さいの新しい味わさびだな

秋田市 雄和小 神田 倫太郎

816 試合前見上げた空の夏の色

秋田市 雄和小 樋渡 倫大

1022 つゆの雲てるてるぼうずがわらってる

由利本荘市 尾崎小 池田 佳暖

1040 さくらんぼつながってるのは兄弟だ

由利本荘市 尾崎小 沖山 芽衣子

小学校五年

10 かい猫はコロンとたおれた暑すぎる

にかほ市 院内小 涌坪 実桜

19 おとし玉十万以上くださいな

にかほ市 院内小 手嶋 楓来

57 暑き日や木の下の風つかまえる

八峰町 峰浜小 小林 士

61 かみながごめんとおいていった虹

八峰町 峰浜小 山脇 雫

66 うたたねをじゃまするでない蜂の声

八峰町 峰浜小 日沼 蓮

563 手火花が音ぶのようにかがやくよ

秋田市 河辺小 羽根川 遥希

小学校六年

195 夏休みなどはちぶの体温計

由利本荘市 西目小 佐々木 瑛汰

197 ホイツスル守りきつたぞ夏の雲

由利本荘市 西目小 今野 岳

213 じりじりと一人歩くよ炎天下

由利本荘市 西目小 澤井 練

841 運動会団長としての責任感

秋田市 雄和小 伊藤 仁

857 日焼けしてながいくつしたはいたよう

秋田市 雄和小 堀井 煌介

918 夏の海遠くに船がうかんでる

由利本荘市 矢島小 佐藤 琴音

中学校一年

22 ひまわりはあたりをてらす希望かな

444 春風の自転車忘れ物はなし 松山市 勝山中 富田 喜栄

483 朝日照り集合かかる雪かきだ 湯沢市 湯沢北中 柴田 宏人

561 夕焼にまっかに染まる雄物川 湯沢市 湯沢北中 眞光 優

41 夏の花見をすませば海の声 秋田市 雄和中 齊藤 未都

96 夏の夜見上げた空に大三角 松山市 勝山中 西山 陸翔

102 麦秋の金色世界風が吹く 松山市 勝山中 崎山 陽和

143 夏来るついに本番中総体 松山市 勝山中 楠橋 芙弥

200 せみしぐれ時の止まった腕時計 秋田市 山王中 阿部 紗幸

575 母の日の花一本もうつくしい 秋田市 山王中 佐々木 康介

317 春雨が冷却装置ランニング 秋田市 雄和中 伊藤 弥姫

318 雪解水覆い被さる岩見川 秋田市 岩見三内中 船木 陽和太

326 打楽器の音色かがやき梅雨明ける 秋田市 岩見三内中 村田 翼

354 稽古後の輝く笑顔ソーダ水 北秋田市 鷹巢中 近藤 沙椰

393 たんぼぼの種がとびかう青い空 北秋田市 鷹巢中 桜田 優希美

北秋田市 鷹巢中 長岐 郁杜

高等学校一年

78 夏休みみんなで遊ぶ水遊び

84 夏の日にあみを片手に虫取りだ 秋田市 秋田令和高等学校 川村 凜空

96 夏の空夜に輝く炎の花 秋田市 秋田令和高等学校 佐藤 蒼冨

120 夏の夜おはやしの音でにぎやかだ 秋田市 秋田令和高等学校 加賀 結人

12 夏の夜おはやしの音でにぎやかだ 秋田市 秋田令和高等学校 清水 希海

12 ミツバチのふと目にとまる夏あざみ 秋田市 秋田クラーク高等学院 藤田 陽太

56 兄さんと釣りの対決夏の海 秋田市 秋田クラーク高等学院 藤田 陽太

124 心臓の鼓動と花火響く夜 大仙市 西仙北高等学校 佐藤 愛華

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

秋田市 秋田令和高等学校 二宮 健瑠

選者講評

◆小学生の部

秋田県現代俳句協会会長

森田 千枝子

〈特選〉

○きのこより目を大きくしきのことり

八峰町 峰浜小二年 浦嶋 琉翔

きのこを見つけたい気持ちがありありと表現されていて、読む人も思わず目を見開いてしまうほど臨場感がある。

ご家族できのこりに出かけたのでしょうか。ちよつとかがんで目を大きく開いてきのこに戦いを挑んでいるような滑稽さもある。

〈秀逸〉

○ラムネのみシュワワと口の中に星

八峰町 峰浜小三年 鈴木 知紗乃

ラムネ瓶のビー玉をころころさせながらくぐりと飲んだ瞬間、口内に広がった爽快感を「シュワワ」と表現し、更に星が鑲められたようだと感じたところに詩情を感じる。

○YOYOYOラップを楽しむ若葉かな

秋田市 日新小五年 中道 愛緒

ビートの利いた曲に合わせて、即興で韻を踏みつつ、お互いの言葉に

よどみなく言葉を返すラップバトル。風に揺れる若葉が絶え間なくキラキラ光り合う。その情景をラップを踏んでいると見立てた。

〈入選〉

○だんご虫ちきゆうをまねてまるくなる

八峰町 峰浜小二年 長門 凜

突つくとすぐに体を丸めるだんご虫。地球の丸さを知って知らずか、作者が真似しているとみたとところが面白い。

○どんぐりにむしがはいつてあまやどり

八峰町 峰浜小二年 大高 煌也

虫に食べられて穴が開いたどんぐり。その雨に雨やどりをしている虫。穴は優しいどんぐりが虫に食べさせたのかも知れない。

○シヤトルランくるしいあとのれい茶かな

由利本荘市 西目小三年 上野 千咲希

きつい練習が終わった後のキンキンに冷えた麦茶は。格別の旨さだ。シヤトルランの苦しい練習を乗りこえたものだけが知る味だ。

○し合終了ユニホームのドロじつと見る

由利本荘市 西目小三年 佐藤 沙紀

負け試合のユニホームのドロなのでしよう。敗因は何だったのか。試合後は、後悔や無念さで胸がいっぱい。「じつと見る」はそういうことなのだ。負けてこそ強くなれるというもの。

○ひまわりが風にゆれてるゆめ見てる

能代市 淳城南小三年 大高 美咲
いつも元気な大きな顔のひまわりが風にうつむいている。夢を見ながらねむっているのだろう。「てる」の繰り返しがりズミカルだ。

○十さいの新しい味わさびだな

秋田市 雄和小四年 神田 倫太郎
これまでのお寿司はわさび抜き。でも十才になった作者はちよつと冒險。いけるぞ。美味しいぞ。ちよつぱり大人に近づいた気分。「新しい味」の発見がお手柄。

○試合前見上げた空の夏の色

秋田市 雄和小年 樋渡 倫大
試合前の意気込み。空を見上げ、今まで積んできた練習を思い出しているのでしょう。夏の暑さに心も熱く燃えている。

○つゆの雲てるてるぼうずがわらってる

由利本荘市 尾崎小四年 池田 佳暖
灰色の雲が広がっている窓。笑顔のてるてる坊主をつるし「あしたてんきになあれ」の小さな願い。相反するものの対比が巧み。

○おとし五十万以上くださいな

にかほ市 院内小五年 手嶋 楓来
現実感のある一句。物価高は子供のおとし玉にも跳ねかえる。「十万以上」とは大きな数字。何か目的があるのでしょうか。

○かみなりがごめんとおいていった虹

八峰町 峰浜小五年 山脇 雫
擬人法が効果的。一鳴の雷。その雨上がりの空にきれいな虹の橋。その情景を、作者と雷との対話に仕立て上げた。雷がごめんとおいて虹をおいていくとはなんと新鮮。佳句。

○手火花が音ぷのようにかがやくよ

秋田市 河辺小五年 羽根川 遥希
パチパチ燃える手火花に音符を捉えたのはお手柄。場の様子や作者の高揚感が伝わってくる。

○夏休みなどはちぶの体温計

由利本荘市 西目小六年 佐々木 瑛汰
夏休み。身体がだるく測ってみると七度八分の熱。予想外の出来事に戸惑っている作者。無駄のない言葉の置き方が上手い。

○ホイッスル守りきったぞ夏の雲

由利本荘市 西目小六年 今野 岳
時間との戦いの勝負。最後まで苦戦を強いられた試合だったが、チーム力で勝利を手中に。選手たちの達成感が伝わってくる。

◆中学生の部

俳人協会秋田県支部長

佐藤景心

〈特選〉

○恐竜もきつと眺めた流れ星

秋田市 山王中二年 古田 心宏

流れ星は地球の誕生当時からあったに違いない。流れ星を眺めて遙か遠い恐竜時代に思いを馳せるのはロマン。

〈秀逸〉

○涼しさや母が食器をすすぐ音

松山市 勝山中一年 野上 愛桜

夕食後の一コマだろう。すすぐ水の音と涼しさの取り合わせが素晴らしい。

○友とみる水面に落ちる夏の月

北秋田市 鷹巣中三年 戸澤 侑慶

水面に映る夏の月。友は、単に気のおけない友とも違う特別な友かもしれない。

〈入選〉

○ひまわりはあたりをてらす希望かな

松山市 勝山中一年 富田 喜栄

向日葵を希望と感じた豊かな感性。

○春風の自転車忘れ物はなし

湯沢市 湯沢北中一年 柴田 宏人

用意万端、春風にペダルも軽い。

○朝日照り集合かかる雪かきだ

湯沢市 湯沢北中一年 眞光 優

止みだした雪、総動員の雪かき開始。

○夕焼にまっかに染まる雄物川

秋田市 雄和中一年 齊藤 未都

夕焼けの雄物川。絵画的な趣。

○夏の海耳をすませば海の声

松山市 勝山中二年 西山 陸翔

夏の海にも思う。心耳で聞く海の声。

○夏の夜見上げた空に大三角

夏の三角の発見。雄大な句柄。

松山市 勝山中二年 崎山 陽和

○雪解水覆い被さる岩見川

中七の措辞が雪解水の激しさを表現。

秋田市 岩見山内中三年 村田 翼

○麦秋の金色世界風が吹く

麦秋の風景が浮かび、風が心地良い。

松山市 勝山中二年 楠橋 芙弥

○打楽器の音色かがやき梅雨明ける

梅雨明けに相応しい音色の「かがやき」。

北秋田市 鷹巢中三年 近藤 沙椰

○夏来るついに本番中総体

心高ぶる中学総体。季語の斡旋が巧み。

秋田市 山王中二年 阿部 紗幸

○稽古後の輝く笑顔ソーダ水

稽古疲れを癒やすソーダ水は格別。

北秋田市 鷹巢中三年 近藤 沙椰

○せみしぐれ時の止まった腕時計

中七の解釈に含み。取り合わせが効果的。

秋田市 山王中二年 佐々木 康介

○たんぽぽの種がとびかう青い空

絵本をみるような思い。清らかな心。

北秋田市 鷹巢中三年 長岐 郁杜

○母の日の花一本もうつくしい

「うつくしい」のは、花と作者の心。

秋田市 雄和中二年 伊藤 弥姫

○春雨が冷却装置ランニング

春雨を冷却装置とみた豊かな発想。

秋田市 岩見山内中三年 船木 陽和太

◆高校生の部

秋田県俳句懇話会会長

佐々木 公平

〈入選〉

○夏休みみんなで遊ぶ水遊び

秋田市 秋田令和高等学校一年 大山 瑞稀
高校生活始めての夏休み、友人と海水浴へ、楽しい思い出を作つて下さい。

〈特選〉

○風鈴の音色が包む祖母の家

潟上市 秋田西高等学校三年 小幡 ののは
久し振り訪れた祖母の家、「風鈴」の音、祖母の笑顔、ホットしたひとときです。

○夏の日にあみを片手に虫取りだ

秋田市 秋田令和高等学校一年 佐藤 蒼冨
梅雨が明け昆虫採集にもってこいの季節、本当に虫取りが好きなんです。

〈秀逸〉

○夏祭りゆれるちようちん光る空

秋田市 秋田令和高等学校二年 黒澤 一輝
提灯に灯を入れた竿燈が、夜空に捧げられた眺めは、稲穂にも見え、壮観です。

○夏の空夜に輝く炎の花

秋田市 秋田令和高等学校一年 加賀 結人
夏の定番。一瞬のうちに消えてしまうはかなさが、人の心をとらえます。

○サイダーや泡とくだける波頭

秋田市 秋田クラーク高等学院三年 加藤 昊
清涼飲料水と波頭との対比、下五の「波頭」に涼しさが伝わってきます。

○夏の夜おはやしの音でにぎやかだ

秋田市 秋田令和高等学校一年 清水 希海
夏の夜空を彩る「竿燈」、差し手か囃し方でしょうか。青春を謳歌しますね。

○ミツバチのふと目にとまる夏あざみ

秋田市 秋田クラーク高等学院二年 藤田 陽太

夏に咲く野薊、ミツバチも採蜜に懸命です。

○兄さんと釣りの対決夏の海

大仙市 西仙北高等学校二年 佐藤 愛華

夏休みの兄弟対決、どちらに大物が釣れるのか、わくわくします。

○心臓の鼓動と花火響く夜

秋田市 秋田令和高等学校二年 二宮 健瑠

大玉の打上げ花火はズシンと体に響き、夜空を一瞬広げ、それは豪
快です。

小・中・高校生の部
短歌部門

入賞作品

秋田県歌人懇話会顧問 高島清子選

特選

ありがとう親への感謝忘れない
辛い思いをさせてごめんね

秋田市 令和高等学校二年 二宮 健瑠

秀逸

夏空に二百八十さきほこる
ふるさと秋田の自まんの祭り

秋田市 泉小六年 長谷川 竜玖

鉛筆の音だけ響く教室で
君との日々が脳裏に浮かぶ

大仙市 西仙北高等学校三年 夏井 悠希

入選

小学校五年

016 雨上がりきれいな虹がかかってて百日草が七こさいている

大潟村 大潟小 古戸 鈴乃

中学校一年

161 通学路のどかな春の豆桜散る花びらを踏みしめてゆく

湯沢市 湯沢北中 菊地 翔太

168 靴ひもを結び直して前を向く試合開始のホイッスル鳴る

湯沢市 湯沢北中 佐藤 愛咲

199 日が昇り君が空から狙ってるブルーベリーは明日が食べ時

湯沢市 湯沢北中 佐藤 一訓

中学校二年

124 紛争はいつになっても終わらない世界に平和が訪れるように

仙北市 西明寺中 櫻田 彩斗

142 寒い夜ポツンと佇む自販機の明り

手から伝わるコーヒーのぬくもり

羽後町 羽後中 真坂 凜

250 サーブ打つ緊張の時ホイッスル狙い定めて決まる一球

湯沢市 湯沢北中 大友 倅亜

高等学校一年

007 賑やかで騒ぐ教室風が吹き夏の暑さを運んでいった

潟上市 秋田西高 大石 美陽

048 にぎやかな群れにみつけれし君の背を一人見送る数歩追えども

秋田市 令和高等学校 榎 実彩稀

高等学校二年

052 高跳びで一年半のイッブスに恐怖で跳べず壁にぶち当たる
秋田市 令和高等学校 小松 咲結

053 青い空入道雲と薫風に夏を感じて心踊らす
秋田市 令和高等学校 佐藤 帆乃夏

高等学校三年

005 色あせた読書カードが目に入る君は今でもハリポタが好き
大館市 大館鳳鳴高等学校 鈴木 一途

選者講評

〈特選〉

○ありがとう親への感謝忘れない辛い思いをさせてごめんね

秋田市 令和高等学校 二宮 健瑠

両親にも辛い思いをさせるほどの事柄。下の句に「辛い思いをさせてごめんね」と悲痛な思いをきわめて率直に表現している。なかなかできるものではなく、ここに作者の人間性を感じ、この歌の深さに打たれた。

〈秀逸〉

○夏空に二百八十さきほこるふるさと秋田の自まんの祭り

秋田市 泉小六年 長谷川 竜玖

竿燈祭りだろう。「二百八十」という具体的な数と、下の句のリズム感が、この歌をいきいきとしたものにし、力強いものにした。秋田を誇る気持ちがよく出ている。

○鉛筆の音だけ響く教室で君との日々が脳裏に浮かぶ

大仙市 西仙北高等学校三年 夏井 悠希

テスト中なのか。鉛筆の音だけが響く静まりかえった教室。この上の句の描写がきわめてリアルで、下の句を生かしている。「君との日々」は過去と取ったが。

〈入選〉

○雨上がりきれいな虹がかかって百日草が七こさいている

大潟村 大潟小五年 古戸 鈴乃

「雨上がりのきれいな虹」への感動が詠われている。「七こ」、よく観察したね。

○通学路のどかな春の豆桜散る花びらを踏みしめてゆく

湯沢市 湯沢北中一年 菊地 翔太

「散る花びらを踏みしめていく」が、一步一步、花の美しさを惜しんでいるよう。

○靴ひもを結び直して前を向く試合開始のホイッスル鳴る

湯沢市 湯沢北中一年 佐藤 愛咲

試合開始直前の一瞬の緊張感を、靴ひも、ホイッスルで捉えた。「前を向く」がいい。

○日が昇り君が空から狙ってるブルーベリーは明日が食べ時

湯沢市 湯沢北中一年 佐藤 一訓

「君」という表現、ユーモラスで魅力的。君はきつと鳥。食べ時を知る鳥は賢い。

○紛争はいつになっても終わらない世界に平和が訪れるように

仙北市 西明寺中二年 櫻田 彩斗

まこと止むことのない紛争。あなたの祈りが届くよう、思いを大事にしてほしい。

○寒い夜ポツンと佇む自販機の明り手から伝わるコーヒーのぬくもり

羽後町 羽後中二年 真坂 凜

日常よく見る光景をこのように捉えた感性。下の句字余りながら魅力ある歌だ。

○サーブ打つ緊張の時ホイッスル狙い定めて決まる一球

湯沢市 湯沢北中二年 大友 倅亜

緊張を高めるようなホイッスルの音。鮮やかに決まった一球。緊迫感が伝わる歌。

○賑やかで騒ぐ教室風が吹き夏の暑さを運んでいった

鴻上市 秋田西高等学校一年 大石 美陽

賑やかで熱気満ちる教室に吹く一陣の風。下の句余韻があり、客観的な目となった。

○にぎやかな群れにみつけし君の背を一人見送る数歩追えども

秋田市 令和高等学校一年 榎 実彩稀

賑やかな群れの中の君を見送るといふ、複雑で微妙な心の動きを詠んでいる。

○高跳びで一年半のイップスに恐怖で跳べず壁にぶち当たる

秋田市 令和高等学校二年 小松 咲結

「イップス」は精神的原因で起こる運動障害とか。辛い体験を詠んだ歌だ。

○青い空入道雲と薫風に夏を感じて心踊らす

秋田市 令和高等学校 佐藤 帆乃夏

夏が来れば夏休み。高二的な夏をどう過ごすかという期待感とわくわく感。

○色あせた読書カードが目に入る君は今でもハリポタが好き

大館市 大館鳳鳴高等学校 鈴木 一途

色あせた読書カード。ハリポタ好きだった君が今も借りているのを知ったのだ。

小・中・高校生の部
詩部門

入賞作品

秋田県現代詩人協会会員 鈴木修一選

入選 鏡

湯沢市 湯沢北中一年 氏家 煌太

特選

私の友達

湯沢市 湯沢北中一年 伊藤 美桜乃

コート内の孤独

湯沢市 湯沢北中二年 大越 柑奈

秀逸

星の輝き

湯沢市 湯沢北中一年 菊地 彩愛

我が弟

湯沢市 湯沢北中二年 高橋 陽

体感温度

湯沢市 湯沢北中二年 佐藤 つぐみ

片思い

湯沢市 湯沢北中二年 藤田 真愛

湯沢市 湯沢北中一年 伊藤 美桜乃
私の友達

私はパレットと見つめ合う
今日はどの色を重ねようかと問いかける
私は描きかけの絵と見つめ合う
輝いたひとみが私をとらえる
私はいっしゅん
どきりとした
夕暮れが私を包む
まぶしさにみんなは目をそらす
チューブもパレットも
絵の中の彼女も 筆も鉛筆も
今日は終わりだよ と話しかける
私はいっしゅん どきりとした
明日もきてねと声がする

湯沢市 湯沢北中二年 藤田 真愛
片想い

私はあなたが大好き
普段は静かでおっとりしているのに
たまに子供みたいにはしゃぐところ
聞いていなさそうで
人の話をちゃんと聞いているところ
自分の世界に入ると
周りが見えなくなっちゃうところ
けれどあなたは
私に興味がないみたい
私が近づくと離れるくせに
きまぐれで寄りそってくる
私はこんなにあなただが好きなのに
あなたは窓から見える野良猫や鳥に夢中
しま模様の長いしっぽと
私を見つめる宝石のような金色の目
今日も私はあなたに片想い

星の輝き

湯沢市 湯沢北中一年 菊地 彩愛

星の輝きやきらめきが
夜の空を照らしている
光の粒があふれ出す
あなたの美しい心のよう
私の心の中にほんのりと
遠く離れた星座も
見つけられそうな気がして
どこまでも広がる宇宙を
ずっとながめていたい
夜明けの空はいつもより青く染まって
星たちはどんどんぼやけていく
でも私の中にはいつまでも
星は輝き続ける

入選

鏡

湯沢市 湯沢北中一年 氏家 煌太

この世で一番こわいのは
やっぱりあいつだ
あいつはどこにでもいる
さいふの中、店の中、そして金庫の中
あいつが動けば世界が動く
あいつがなくなれば世界は動きをとめる
あいつがいると便利になり
あいるがいないと不便になる
あいつのせいで差別がうまれることもある
そんなおそろしい性格をもったあいつ
今日もどこかであいつが動いている
人を助けたり
人をおとしめたり
あいつの本性は心の鏡

湯沢市 湯沢北中二年 大越 柑奈
コート内の孤独

自分の前にある二百十五センチのネット
でも私はブロックで跳ばない
攻撃もしない
できない

私の役目はボールを上げること
つなぐこと
そのため必死でコートを走り回る
ボールを追いかけ
ただひたすらに走り回る

試合中

私は何も聞えない
ただ何か言われているのは感じる
それは応援か怒りの声か
それとも悲観的な声援なのか
私には分からない

コート内に仲間がいるのに
ベンチに部員がいるのに

応援席にたくさんのお客様がいるのに
なぜか私は孤独を感じている

私は今
「勝負」という冷たい敵と向き合っている

我が弟

湯沢市 湯沢北中二年 高橋 陽

生まれたて
今にも崩れそう

ちよんと頬をつついてみる
誰かが壊してしまわないか
不安なくらい

あれから四年
立派な怪獣に育った
私も扱いに慣れ
ケンカもするようになった

相手はチビだが油断は禁物
恐ろしい速さで攻撃してくる
その威力はとて四歳とは思えない

それでも僕は弟が好きだ
弟の寝顔を見ていると僕も眠くなる

体感温度

湯沢市 湯沢北中二年 佐藤 つぐみ

チームメイトと海に行った
練習試合の後に

相手は強くて、結果は散々

浮かない気持ちのまま海に向かった

海は冷たかった

体感マイナス二十五度

慌てて少し後ずさっても

波は足をさらっていく

砂が崩れる

転びそうになった

ふと前を向く

限りなく続く水平線

波が白く輝いている

空を見上げると

太陽がじりじりと私達を照らしていた

海から上がった

砂は思っていたよりずっと熱くて
じっとしてなんかいられなかった

先に行く仲間の背中を追い抜こうと
私は砂を蹴った

波が 私の心を洗ってくれた
太陽が 私の心に火を灯した

選者講評

今年は、一三一の応募がありました。昨年の一名の倍を越す数で驚きました。健やかに過ごす毎日の様々な表情を、詩の言葉で捉えた活きのよい作品が多く、皆さんと対話しながら、元気に生きる力をもらったような感覚を味わいました。

特選「私の友達」 パレットに問いかけて絵を描き進める作者。一見静かな作業の中に、対話や交流が豊かに盛り込まれていて、創作の喜びを教えてくださいます。絵や画材を「みんな（友達）」と親しげに呼ぶ「私」。「明日もきてね」という不思議な声が未来の扉を開き、愛にあふれた絵の完成を約束します。

秀逸「星の輝き」 若い心をひきつけてやまない星空の魅力を、伸びやかな言葉で描いています。見えるものの向こうにあるものにまで思いを馳せるのは、「あなた」が力をくれるからでしょうか。星とお別れする夜明けの情景も魅力的で、美しいものを心に灯しつづけることの大切さを教えてくださいます。

秀逸「片思い」 相手は人だと思っただけで読み進めると、「野良猫や鳥に夢中で「？」となり、「しま模様の長いしっぽ」で猫が目の前に現れる。この展開の仕方が絶妙です。大きな愛が猫を包み、幸せな猫は家族を照らすことでしょうか。「片思いでいいんだ」と優しく笑う「私」の横顔が見えるようです。

入選「鏡」 この世で一番こわいという正体不明の「あいつ」。スリリングな展開に導かれ、ラスト「あいつの本性は心の鏡」にドキリとしました。「人を助けもおとしめもするもの（お金？）」だからこそ、心をきれいに保つ必要があるのだと思つたことです。人間社会の闇の部分へ鋭い矢が放たれました。

入選「コート内の孤独」 勝負の厳しさを偽りなくつづつた作品。「なぜか私は孤独を感じている」の率直なひびきに心を打たれ、声援を送りたくになりました。チームプレイを何となくたてたて終わる作品にはない、存在感があります。この一生懸命さが報われて勝利を呼ぶとき、生まれる感動は本物でしょう。

入選「我が弟」 弟と過ごす健やかな毎日。四年間の成長を見守ってきた

「兄」のまなざしの優しさにほっこりしました。生まれたての弟の様子から中盤の活発さの描写、そしてラストに包まれるような幸福感など、表現にも変化があり、読ませる家族の詩です。

入選「体感温度」 敗戦の余韻と復活に向かうエネルギーが感じられる作品です。浮かない気持ちや晴れやかにしてくれた波と太陽の力。「先に行く仲間の背中を追い抜こうと／私は砂を蹴った」の静から動へと移るところは特に魅力的で、作品に躍動感を与えています。

以上の入賞作以外にも魅力的な詩がありました。題名をあげます。「サッカーとの四年間」「カーテン」「時間の不思議」「夕焼け」「大切な存在」「夏のきらめき」「雲と私」。好きなものに思いを託すとき、詩の言葉が輝きを増すことを改めて感じました。

小・中・高校生の部

川柳部門

入賞作品

秋田県川柳懇話会会長

長谷川 酔 月 選

特選

蜂の歌花畑での宴かな

湯沢市 湯沢北中一年 柴田 平次

秀逸

ジャンプして砂全体を独り占め

湯沢市 湯沢北中二年 大友 ゆい

登校中ふわり香るは夏の色

湯沢市 湯沢北中二年 佐藤 つぐみ

入選

小学校一年

053 すいかわりわれたところがおいしそう

秋田市 河辺小 関口 文乃

小学校二年

071 せんぷうきくるくるまわる目がまわる

秋田市 河辺小 佐々木 郁穂

079 たんぼぼもちえがありますすごいよね

秋田市 河辺小 松田 月花

小学校四年

107 友達はいつも元気だ太陽だ

五城目町 五城目小 加賀谷 珠希

小学校五年

103 親友のやさしい心ピンク色

五城目町 五城目小 嶋崎 咲希

小学校六年

008 つなつかみ青空見上げぐつと引く

八郎潟町 八郎潟小 小玉 杏樹

084 「お年玉預かっておく」信じるな

秋田市 河辺小 高堰 勇吾

中学校一年

023 雨あがりのんびり歩くカタツムリ

湯沢市 湯沢北中 木村 蒼空斗

029 太陽にっこり笑うひまわりよ

湯沢市 湯沢北中 佐藤 愛咲

047 夏の夜ずっと待ってた虫の歌

湯沢市 湯沢北中 氏家 煌太

061 一戸建手が出る土地は熊も出る

湯沢市 湯沢北中 佐藤 流輝空

中学校二年

106 「片思い」君の隣に座ってみたい

湯沢市 湯沢北中 武藤 青葉

選者講評

〈特選〉

○蜂の歌花畑での宴かな

湯沢市 湯沢北中一年 柴田 平次
蜂が花畑で飛んでいる様子を見て、蜂の宴を想像したのですね。素晴らしい作品です。 素晴

〈秀逸〉

○ジャンプして砂全体を独り占め

湯沢市 湯沢北中二年 大友 ゆい
ジャンプの人が着地する一瞬をとらえています。とてもいい句です。

○登校中ふわり香るは夏の色

湯沢市 湯沢北中二年 佐藤 つぐみ
服装や風景などに夏を感じたのかな。感性を感じる作品ですよ。

〈入選〉

○すいかわりわれたところがおいしそう

秋田市 河辺小一年 関口 文乃
すいかからあかいみがでたところをうまくひょうげんしましたね。

○せんふうきくるくるまわる目がまわる

秋田市 河辺小二年 佐々木 郁穂
まわるせんふうきみてみると、めがまわりそうですね。いい句です。

○たんぼぼもちえがありますすごいよね

秋田市 河辺小二年 松田 月花
たんぼぼは、おちたところではなをさかせます。かんしんしますね。

○友達はいつも元気だ太陽だ

五城目町 五城目小四年 加賀谷 珠希
明るくてげんきな人を太陽のように思っただんですね。いいですよ。

○親友のやさしい心ピンク色

五城目町 五城目小五年 嶋崎 咲希
ピンク色からはやさしい思いが伝わってくるようです。いい句です。

○つなつかみ青空見上げぐつと引く。

八郎潟町 八郎潟小六年 小玉 杏樹
上を見上げながら、力いっぱい引いている様子が浮かんできますよ。

○「お年玉預かっておく」信じるな

秋田市 河辺小六年 高堰 勇吾
もらったお年玉がもどってこないと思ったのかな。面白い句ですね。

○雨あがりのんびり歩くカタツムリ

湯沢市 湯沢北中一年 木村 蒼空斗
カタツムリの動きをうまくとらえました。様子が伝わってきます。

○太陽にっこり笑うひまわりよ

湯沢市 湯沢北中一年 佐藤 愛咲
ひまわりが笑っているように感じたんですね。いい句ですよ。

○夏の夜ずっと待ってた虫の歌

湯沢市 湯沢北中一年 氏家 煌太
夏に鳴く虫の音がステキですね。そんな気持ちたちが伝わってきます。

○一戸建手が出る土地は熊も出る

湯沢市 湯沢北中一年 佐藤 流輝空
熊が出る土地は安く買えるということかな。着眼が素晴らしい。

○「片思い」君の隣に座ってみたい

湯沢市 湯沢北中二年 武藤 青葉
思春期の気持ちを素直に表現しました。とても素敵な句ですよ。

応募状況 (第66回大会)

【一般の部】

応募総数	部門別	応募者			応募作品総数
		計	県内	県外・海外	
135人	俳句	91人	86人	5人	182句
	短歌	40人	26人	14人	80首
	詩	10人	7人	3人	10篇
	川柳	26人	23人	3人	76句
	計	167人	142人	25人	348作品

【大学生の部】 (R6年度応募なし)

応募総数 (学校数)	部門別	応募者			応募作品総数
		計	県内	県外・海外	
0校	俳句	0人	0人	0人	0句
	短歌	0人	0人	0人	0首
	詩	0人	0人	0人	0篇
	川柳	0人	0人	0人	0句
	計	0人	0人	0人	0作品

【小・中・高校生の部】

(1) 小学生

応募総数 (学校数)	部門別	応募者			応募作品総数	備考 1次選考通過
		計	県内	県外・海外		
14校	俳句	1,197人	1,197人	0人	1,197句	426句
	短歌	26人	26人	0人	26首	10首
	詩	0人	0人	0人	0篇	0篇
	川柳	117人	117人	0人	117句	117句
	計	1,340人	1,340人	0人	1,340作品	553作品

(2) 中学生

応募総数 (学校数)	部門別	応募者			応募作品総数	備考 1次選考通過
		計	県内	県外・海外		
10校	俳句	610人	480人	130人	610句	257句
	短歌	273人	171人	102人	273首	52首
	詩	131人	131人	0人	131篇	131篇
	川柳	133人	133人	0人	133句	133句
	計	1,147人	915人	232人	1,147作品	573作品

(3) 高校生

応募総数 (学校数)	部門別	応募者			応募作品総数	備考 1次選考通過
		計	県内	県外・海外		
6校	俳句	161人	161人	0人	161句	161句
	短歌	58人	58人	0人	58首	58首
	詩	0人	0人	0人	0篇	0篇
	川柳	110人	110人	0人	110句	110句
	計	329人	329人	0人	329作品	329作品

(4) 小・中・高校生合計

応募総数 (学校数)	部門別	応募者			応募作品総数	備考 1次選考通過
		計	県内	県外・海外		
30校	俳句	1,968人	1,838人	130人	1,968句	844句
	短歌	357人	255人	102人	357首	120首
	詩	131人	131人	0人	131篇	131篇
	川柳	360人	360人	0人	360句	360句
	計	2,816人	2,584人	232人	2,816作品	1,455作品

石井露月顕彰全国俳句大会秋田市短詩型大会実行委員会名簿

役職名	氏 名	所 属
会 長	伊 藤 洋 文	雄和芸術文化協会会長
副会長	工 藤 一 紘	石井露月研究会代表
委 員	京 極 雅 幸	露月会代表
委 員	加 藤 一 弥	秋田市俳句人連盟会長
委 員	長 沼 隆	超雲吟社事務局長
委 員	大 友 ヒロ子	雄和短歌会会長
監 事	京 極 孝 一	女米木文芸協会会長
委 員	渡 辺 歩	(株)秋田魁新報社事業局局長代理
委 員	岡 部 友 明	秋田市観光文化スポーツ部文化振興課長
委 員	古 木 実菜子	秋田市教育委員会副理事兼生涯学習室長
委 員	菊 地 篤	秋田市立雄和小・中学校長
監 事	伊 藤 治	秋田市市民生活部雄和市民サービスセンター副理事兼所長

令和6年9月14日

石井露月顕彰 全国俳句大会兼第66回秋田市短詩型大会

編集 : 石井露月顕彰全国俳句大会
秋田市短詩型大会実行委員会

<事務局>

〒010-1223

秋田市雄和妙法字上大部48-1 秋田市立雄和図書館内

TEL018-886-2853 FAX018-886-3034

表紙の句説明

ぐんしゅうに た
群衆尔足りて濁らず山清水
やましみず

大正四年（四十六歳）作

大勢のどを潤しても、十分の水で何ひとつ濁ることのない、
良い湧水であるよ。

高尾山に於いて下刈共同作業をしたとき、二句の中の一である。



露月山廬にて